
生まれ変わっても

諒夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わつても

【Zコード】

Z8123D

【作者名】

諒夏

【あらすじ】

結婚式当日に恋人を無くした彼女。彼女は彼をいまだ引きずり、思い出に出来ずに居ます。乗り越えなければならぬけど、でも今はまだ思い出にしかならず・・・

再出発（前書き）

寂しい…辛い。

そんな思いだけが自身を支配する。

彼女は今、そんな思いから抜け出したくて…

再出発

ありか…

”誰かの声がする…”

ひどく懐かしくて、切ない思いが胸をこみ上げて来るこの声…

私は立ち止まり、後ろを振り返った。

でも、そこには誰もいなかつた。

そこはただの路地裏で、まだ朝早い時間だから人通りだつてそんなに多くない。
だから、

”気のせい…だよね”

あの人の声が聞こえた気がしたの…
だつて、それはありえないことだから。

もう数ヶ月前の出来事。

幸せの絶頂期…本当にそういう時期であったと思つ。
人生で何度もそうはない。
幸せの絶頂期。

結婚式。

二人で数ヶ月という時間をかけて選んで選んで最終的に決めた場所。招待する人に対しても意見が合わないこともあった。

喧嘩も、もおダメかもと何度も思つたか。

でもその喧嘩の後、必ず思うことは、

『この人と一緒に生きていきたい』と言つた事。

なのに…突然の不幸が私たちを襲つた。

婚約者である彼が結婚式当日、事故に遭つて、そのまま息を引き取つてしまつたのだ。

後から聞いた話では路上に飛び出した子供を助けようとしたのだと言つてた。

でもあの時は気が動転して、何を言われても覚えてなかつた。

自分の子供のせいだ、『ごめんなさい。

そうその飛び出してきた子供の母親は誤りに来たそつだが、私は作り笑いしか出来ず、

何を話したかなんてほとんど記憶にない。

よく物語ではある、シリアスの王道。

でも、自分がそんなのに遭遇するなんて…思いもしなくて…
なのに…

” 真琴…… ”

空を見上げた私はその場所をそつと後にした。
思い出しても辛いから…

そして、そつと扉を開じて心の中で彼に『行つて来ます』とだけ呟いた。

再出発（後書き）

再出発する彼女をひづれ見ていてやつてください

忘れられない（前書き）

ありかはまだ忘れられない。

職場を移つたのにその人に似た人が教育係で…

忘れられない

自分にとつてここは再出発の地。

結婚するまで私は真琴と同じ職場に居た。

そして職場の同僚たちも式当日に参加していた。

もちろん、その当日、彼が亡くなつた事は参加した事を知つてゐる。だから、職場に戻つても彼の話題には触れず、真琴の名前が出てくるたびに気まずい雰囲気。

その雰囲気に耐えられなくなつた。

”かわいそうに…”

つていう視線で見られることが。

『私は、全然大丈夫』

そう言つてもやつぱり氣を使わせてしまつのは当然で
課長にどこか別の所に派遣してくれるよつに願い出るのにそんなに
時間は掛からなかつた。

そして、課長もそれを受け入れてくれた。

地方へ来たのはあの人といた職場にいるのが正直、限界だつた。
忘れるなんて出来ないし、居ないのに…影を追つてしまつ自分が嫌
だつたから。

そして、誰も知らないところで再スタートをきりたかつた。

『忘れる事は無理だけど…』

でも、思い出にするには彼を知らない所の方がいいかなつて。

数年、いや、もっとかかるかもしれないけど、でも、いつか
『そんな事もあつたよね』って笑える日が来る…といいなって。
真琴もきっとそう思つてるはずだから。

だけど、それは突然やつてきた。

会社で自分を育ててくれる教育係の人…

”真琴…！？”

亡くなつた彼にそつくりな人、和葉彰人さん。

「はじめまして、和葉です」

「…始めてまして、上野です」

笑い方、仕草までまるで同じ。

それなのに…ここにいる人は彼じゃないだなんて…

新しい職場、新しい場所、何もかも、新しくやり直すつもりだった
のに…

”真琴…私はまだあなたを忘れられない。”

私はオフィスの窓から外を眺めた。

それからも和葉さんの姿を見ると、真琴と比べている自分がいた。
だから、なるべく関わらないように意図的に避けていた。
また失つたら…と思うと人と関われなかつた。

新しい職場の先輩で、私によく話しかけてくれる隣の人、紫栖諒夏

さん。

ものすゞくよく話し掛けてくれて、内気になつている私にすゞく良くしてくれる。

人の輪を意図的に避けている私を強引に仲間に引き入れてくれて、今では社内でも浮かずに済んでる。

そこで私自身が入ってきた時から結構噂されていたのだと知ったのはつい数週間前。

その理由が和葉さん関連で、教育して貰える羨ましい存在と言つことだ。

和葉さんは社内でも人気が高く、皆に好かれているという。そういう人は本来、妬みとか多いものだが、彼はその類の人ではないらしい。

「あ～り～か～ちゃん。」

今日の夜、飲みに行かない？

諒夏さんに誘われて飲みに行くこと。

「いいですよ」

「じゃあ、一緒に定時に仕事終わらせようね^_^

「彼氏さんはいいんですか？」

諒夏さんには別の課だけど彼氏さんが同じ会社にいる。経理に隣接している経済一課にいる紅月魁斗さんだ。こちらもやり手の人で、所内でも人気が高い。

「あの人は今日は接待だつてさ」

ホントか嘘か知らないけど。

でも浮気はしない人だつて信じてるから・・・

そういうてもパソコンを打つ手は休めない。

定時に仕事を切り上げて、飲み屋に連れて行かれた。

場所は個室ばかりの居酒屋さん。

あつたかい感じの掘りごたつでのんびりできる雰囲気。

「で、なんか悩んでる?」

「…どうしてですか?」

そんな風に見えますか?

ありかの間に諒夏は苦笑いを浮かべる。

「和葉君がね、ありかちゃんが悩んでるみたいですね」

私に助け舟求めてきたんだよ。

そういうつて苦笑いを浮かべた。

「ありかちゃんが、何か悩んでるみたいだけど、自分には何も出来ないからって」

つていうか避けられてるみたいなんですけど、理由がわからないんです。

そう言ってね。。

「…悩みっていうか、忘れられないことがあるんですね」

それを思い出して、辛くなつてるつていうか。

「…それは聞いても平氣なこと?」

「…微妙ですね」

私が苦笑いを浮かべると諒夏はお酒を飲みながら話を始めた。

「実はね、和葉君、昔の彼女にひどい目に会わされたらしいんだ
独り言だからね。気にしないでね。

そういうつて諒夏さんは話し始めた。

その彼女は和葉君を懐柔していろんなものを買わせようとしたらしい。

でもそれは彼女にとっての利益であつて、

彼にとつて結婚しようと考えていた相手に裏切られるところの
はすゞシヨックだつたらしい。

「だからそれからは女の子ともあんまり話さなくなつたんだけどね
ぜんぜんそういう風に見えないでしょ？」

私が頷くと諒夏はにつこりと笑う。

「でも、それを乗り越えたから今の彼がいるんだよ」
彼がそんときの自分に似てるつて言つてた。

「諒夏さんてどうしてそんな事知つてるんです？」

「直接聞いたにきまつてるでしょ？」

私が調べるほど暇じゃないよ。

そういつてジヨックを一気に飲み干した。

きつと諒夏さんの事だから相談させちゃつたんだろうな…和葉さん。
そういうの本当に聞き出すのうまいんだよな…
営業に行つたら絶対につまく〜と思つただけど…

でも前にそういう話をしたら「面倒」の一言で終わつてしまつた。
確かに、面倒な事が嫌いな諒夏さんはそういう事が大嫌いだ。

「で、何を悩んでるの？」

微妙でも話せることは話してみてよ。

そついつた諒夏に私は意を決して呴いた。

真琴の事、同じ職場の同僚だつた事。

結婚する当日に彼が亡くなつたことを。

今でも忘れられない。

話してゐるうちに涙があふれる。

彼がなくなつたと聞いたとおり田原へしたはずの涙が……泣かれる。

「…そつか…」

でもさ、ありかちやん。

そういうつて諒夏はハンカチを差し出す。

「彼、和葉君ならあなたのことわかつてくれるわ

怖がらずに飛び込んでみたら?

でも好きだなんていわれてないんだから、そななるわけないんだけど。

それから数日…

諒夏さんから言われて考えてみたけどそんなに経つてないんだもの忘れられない。

『真琴…』

右手に変えぢやつたけど、でも今でも嵌めてる婚約指輪。これを決める時も凄くもめたよね?

『えへ、婚約指輪はダイヤモンドじょ?』

ほり、給料の何か月分つて言つじやない。

ありかの言葉に対し真琴はバカにしたような視線を向けた。

『あんな、あれば誤解なんだよ、そもそも結婚指輪つてのはダイヤモンドに限らず、

真珠でも誕生石でもいいんだよ。まあ、プラチナ、ゴールドってのは甲丸指輪が多いらしいけど』

石に関してはそんなに決まりはないみたいだぜ。

真琴の言葉にありかは『へえ～』と驚いた表情をした。

『なんで真琴そんなこと知ってるの?』

『あ?これ買った時に店員さんから聞いた』

そう言って出されたのは良く見る紫のボックスだった。

『…真琴…これ…』

『お前の誕生日8月だろ?』

で、店員さんに聞いたらこれがいいんじゃねえかつて言われてさ』

『あけていい?』

『ああ』

リボンを丁寧に外し、ふたを開ければ緑色の石のついたシルバーリング。

『これ…なんて石?』

『グリーンアベンチュリン、意味を聞いてこれにした』

『意味?』

そう、グリーンアベンチュリンは8月の誕生石ではないものの、黄色が8月の月カラーラしく、

そして、結婚するなら幸福を意味するこのグリーンアベンチュリンが良いのではと進められたらしい。

『明るく輝き、幸せをもたらす…って』

俺らの未来が明るく輝いて幸せをもたらしてくれるようだ。

『…ありがと、真琴』

真琴に左手の薬指に嵌めてもらつたのを思い出し、
ありかはおもむろに右手から左手の薬指に嵌めかえた。

あの時のやり取りがいつか鮮明に思い出せる。
まだ忘れない。
いや、忘れる事なんて…出来ない。

ありかは一人電車の車窓から視線だけを外に向け、
左手に嵌めた指輪を右手で覆うようにぎゅっと握り締めていた。

忘れられない（後書き）

ありかちやんが真琴と並んでこの感じで過りましたかが出たらこいな
思います

ひつかかり（前書き）

真琴を忘れられない……ありか。

でも仕事をきっかけに同僚の人と打ち解ける機会餓あり……
でも真琴に似た彼にもなにやら事情が……

ひつかかり

生まれ変わったら…

そんな話もしたよね、真琴…

いつでも想いだすのはあなたの事だけ…

「あ～りかちゃん」

話しかけてきたのは同じ課の諒夏さんだった。

「…どーしました？」

「いや、にこじや何なんだけど…」

ちょっと頼みたい事があつてさ。

「会議室まで来てくれないかな？」

尻切れどんぼの状態で呼び出されて首をかしげるありか。

会議室に入ると諒夏さんから一枚の紙を渡された。

それは今度行われるパーティーの資料だった。

「これって…」

確かプレゼン作業を行つてたんですよ、諒夏さんが。

隣の席だからあわただしく資料と格闘してた彼女を横で見ていたありかは知っていた。

彼女がそれを通すのにどれだけの力を尽くしたか…

「プレゼンは通つたんだけどね、ダブっちゃつて…」

「え？」

「ほら、海外市場も取り扱つてるでしょ？この会社。

でね、その課でうちのさ…」

実は彼氏さんがその課で働いていてそこで指名したのが、いわすと

わかるでしょ？

公私混同ですよ、マジで。

「でね、課長命令が出ちゃって、引継ぎ探してんだけど、ありかち
やんなら…と思つてどかな？」

無理そう？

「…いいですよ、諒夏さんは色々とお世話になりましたし…」
やりますよ。

「ありがとーーーお。はあ、助かつた。」

明日、会議室で説明なんどといわれ、折角通つたプレゼンを私が引
き継ぐ事になつた。

「災難でしたね。あんなにがんばつてたのに
「ホントよ。今度プレゼン取れるチャンスあつたらアイツにも手伝
わせなきゃ」

そんときは協力してよね。ありがとうございます。

「もちろん、微力ですけど」

そういうつて苦笑してられる時間が今はありがたかった。

何かに熱中してないときつと想いだしてしまつ…

” 真琴… ”

資料と格闘して数日…

疑問点が出てきて、それを知らうと隣を見れば空席。
ボードを見れば出張でそのまま直帰となつてた。
誰に聞けばいいんだと課長に聞けば彼と…和葉さんも同じチームだ
と初めて知られた。

彼の居場所を聞けば会議室にある個室…
まあ一人で抱えてる仕事が大変であればそこそこもつてやる場所な
のだが…・・・

そこにいると教えられた。

「ンンン…

「失礼します」

「…上野…」

なんか仕事か？

「…えつとこのプレゼンの件なんですが」

「…プレゼン?」

どれだ？

メガネをかけ、そして上半身はシャツだけを羽織、ネクタイが少し緩めなのが見え、ちらりと視線を流せば椅子に上着は掛けであった。

久しぶりに話すのがこんな密室なんて…

少しどキドキしながら資料を渡し、マークーで引いてある場所をさす。

すると彼は驚いた表情をして…

「お前もこのプレゼン関わってるのか？」

「はい。紫栖さんの変わりに…」

「紫栖の？」

和葉さんに諒夏さんの代わりを引き受けた経緯を話すと彼はため息をついた。

「どうやら諒夏さんの彼氏さんの事で呆れている様子で…

「あいつもしかたねえな」

これ、アイツがどんだけ力なくしたかわかつてねえのかよ。
確かに、その資料を作るのに諒夏さん何日も残業して、寝る間も惜しんで作ってた。

それをいくら課長命令だからといってね。

「でも、諒夏さん、結構胆座つてましたよ」

「そりやそーだろ、あいつの、ああ、あいつの彼氏な、今大変だからな」

「え？ そーなんですか？」

「ああ、まあお前だからいいか。」

和葉さんが話してくれたのは諒夏さんの彼氏さんの部下が失態を犯し、取引先との間にトラブルが勃発したらしい。

それを解決するために無茶な要求をする相手側をどうやつたら波風立たせずに攻略するかで諒夏さんの彼氏さんの処遇がきまるらしい。「…まあ最終的にはクビつつりのも念まれてるらしくからな

「…確かに、諒夏さんなら…」

そういうの頭回りそうですね。

「あいつの情報網はすげえよ」

伊達にこじりでお局様の名前持つてねえ

「お局？」

「ああ、そんなに長くこじりこじるわけじゃねえんだけどな」

あいつ。

「そりなんだ…」

「まあ、それだけあいつの情報網がすごいってことだ」

和葉さんの話だとそんなに長くいるわけじゃないが、人付き合いがうまい諒夏さんは社内では結構なやり手として通つてるらしい。「だけど、ここのプレゼン、たぶんあいつお前に期待してんだろうな

「え？」

和葉さんがメガネを外した。

仕事する時だけメガネをつけるってのは聞いてたし、違和感もなかつたんだけど。

「あいつから、ああ、紫柄な、あいつから聞いてたんだよ。自分の代わりをオレともう一人に任せるとかって」

「お前、あいつにそれだけ信用されてるってこった」

そういうとまたメガネを掛けて「さつき聞かれたとこだけよ」と

椅子を勧められ、
説明を受けた。

その日から私と和葉さん一人だけの仕事が始まった。
仕事の時だけは彼を仕事のパートナーとだけしか認識してないから
か、話も弾む。

仕事だけじゃなく、普段の話もたまにしたりする。

男性：じゃなく、人として見れる。

そして最近気づいたんだけど見た目は一緒にでも真琴…やっぱりあなた
だと違う。

だから平気。

真琴：

私：がんばってみたい。

あなたとの事忘れられないけど…

でも、今まだ少し…頑張ってみたいの。

駄目かな？

空に問いかけるけどもちろん返事なんてない。

わかってるけど、なんとなく『しうがないな』って声が聞こえた
ような気がしたの。

そして、その二人だけの仕事が始まって数日…
和葉さんが仕事を休んだ日があった。

ボードには『病院のため休み』と一日間書いてあった。

「どうか悪いんですか？」

和葉さんって。

隣の諒夏さんに聞けば諒夏さんはパソコンに向かいながら「ああ…」と呟いた。

「和葉君ね、年のわりにこの会社では結構入った新しい部類に入るんだよ。」

病気でね、昔から心臓弱かつたみたい。

「へえ、そうなんですか」

あんまりそう見えないんですけど…

私の言葉に諒夏さんはさらっとすごい事を口にした。

「そりやそうでしょう、ん?去年か?心臓を摘出手術したのよ。」

ほら、聞いた事あるでしょ?

脳死と診断された人が…って。

「え?じゃあ…」

「そ、その手術して今みたいになつたのよ。」

今回は毎月の定期健診で休むの。

「そう…なんだ」

ありかは何か引っかかるものを感じた。

…あれ?

なんか…

なんだか…?

どつかで…

そんな話…

……どひだつたつけ？

ひつかかり（後書き）

何かつながりがあるかも？とか思い始めた方！
鋭い！！
簡単にわかるよつこ書こうつかなつて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8123d/>

生まれ変わっても

2010年10月9日05時54分発行